

保育者養成における「表現」教育に関する研究

梨 本 竜 子

About the contents of synthetic instruction of "expression" subject in child-care worker training

Ryuko Nashimoto

1 研究の背景と目的

保育における「表現」の領域は幼稚園教育要領が1989年（平成元年）に改定され、5領域になったときにできた領域である。1956年（昭和31年）、それまでの保育要領に替わって初めて幼稚園教育要領が告示された際、保育内容に示された6領域は「健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作」であった。これは、小学校教育の教科との一貫性、連続性に重点が置かれたものであった。しかし、幼児期は遊びを通してさまざまなことを具体的、総合的に経験していく時期であり、具体的に経験したことを分野別に体系づけた知識として学んでいく小学校以上の時期とは異なっている。そのため、幼稚園における保育内容も、小学校以上の教科のように文化の体系的なまとまりを示すのではなく、幼児の経験の総合性を損なわないように示すことが求められてきた。そこで、1989年（平成元年）の改定では、「領域」は幼児の発達を見る側面として捉えられることとなった。そして、名称も教科と混同しないよう「健康、人間関係、環境、言葉、表現」と変更された。これは、翌年の保育所保育指針の改定においても同様であり、その後の教育要領・指針の改訂でも継承されている。乳幼児の表現活動は多種多様であり、音楽や造形といった「芸術的な」表現として括ることはできない。例えば、幼児の豊かな表現遊びである劇的で総合的な遊び「ごっこ」は、幼児の主体的表現活動として重視されるべきものである。現行の幼稚園教育要領において「感性と表現に関する領域『表現』」は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」として説明されている。

保育者（幼稚園教諭及び保育士）の養成課程において、これまで「表現」に関する科目は「音楽」「造形」の他、「身体」「言語」などの分野に分けて教示されてきた。それらを保育者として体験し、その方法や基本的技術を学ぶことは、保育の場で乳幼児に対応する際に多様さや豊かさを生み出す基礎となると考えられる。教示されたその分野の専門的な技法や課題を、直接そのまま乳幼児に提示するのではなく、専門性をもって消化した上で保育の内容として応用し、活かしていく必要があるのである。しかし、分野別に教示するのみで、あとは保育の場での実践に任せるといったことで、果たして専門職としての保育者養成にとって十分といえるのであろうか。そのため、乳幼児の「表現」を支えるための

指導について、現在各養成校においては、分野を超えた「表現」としての教育に取り組み、様々な内容を展開しつつある。

本研究の目的は、各養成校における分野別に依らない総合的な「表現」教育についての現状を比較検討し、そのあり方について考察するものである。

2 研究方法

保育の「表現」科目に関するシラバスを分析し、比較検討する。ウェブ上にカリキュラムおよびシラバスが公開されている、全国の保育者養成課程（幼稚園教員養成課程および保育士養成課程）を備える4年制大学（以降大学）・短期大学（大学の短期大学部を含む）を対象とし、そのうち内容が「音楽」「造形」「身体」「言語」などに区分されていない「表現」科目のシラバスを抽出して内容を分析する。科目名が「表現」のみとされていても、内容的にある分野のみに偏っている場合は除くものとする。

各大学ではどのような目的と内容でそれらの科目を設置しているのか、各養成課程のシラバスから分析を行った項目は「授業科目名」「授業形態と単位数」「配当年次・開講時期」「必修・選択の別」「授業のねらい、到達目標」「授業概要・内容、授業計画」「担当教員」の7点についてである。

3 結果

（1）分析対象について

ウェブ上にカリキュラムおよびシラバスが公開されている、全国の保育者養成課程を備える大学・短期大学のうち50校（大学12校、短期大学38校）を抽出し調査した結果、うち24校（大学6校、短期大学18校）で「音楽」「造形」「身体」あるいは「言語」の分野を統合した、若しくは分野に偏らない「表現」科目を設置していた。1校に複数科目設置されている場合もあり、計27科目を分析対象とした。「子どもとあそび」など、授業科目名に「表現」とつかないものの中にも内容に「ごっこ」等子どもの表現に関するものを扱っている場合もみられたが、今回は分析対象としなかった。

（2）授業科目名について

授業科目名に関しては、表1の通りである。「表現」の他には「保育内容」（18科目）、「総合」（6科目）、「指導法」（5科目）の語彙が多用されていた。分析対象である24校のうち、22校がこれらの他にも分野別に「表現」関係の授業科目を設定しており、それとの区別のためにも「総合」が使用されたものと推測される。科目名のⅠ・Ⅱや、A・Bなどは抜いて示している。

表1 授業科目名

授業科目名称	科目数
保育内容 表現	6
保育内容（総合表現）	3
保育内容研究（表現）	3
保育内容研究（幼児と表現）	1
保育内容演習・表現	1
保育内容指導法 表現（幼児と表現）	1
保育内容指導法 表現	1
保育内容指導法演習・表現	1
保育内容の指導法 表現（音楽・造形）	1
「表現」指導法・総合表現	1
保育の表現	3
子どもと表現	1
総合表現	1
保育表現技術（総合表現）	1
保育表現技術演習（こどもの文化）	1
保育表現演習	1
計（1課程に複数科目設置の場合有り）	27

(3) 授業形態と単位数、配当年次・開講時期、必修・選択の別について

授業形態と単位数について表2に示す。授業形態については演習の形式で行われることがほとんどを占め、単位数では1単位が17科目、次いで2単位が9科目と1単位の設置が多かった。また、配当年次、開講時期については表3の通りである。1単位の科目は前期または後期の半期で行われ、1年次の後期に設定されている科目数が10と最も多かった。さらに、必修科目であるか選択科目かの内訳を表4に示す。保育士資格または幼稚園教員免許取得のための必修または選択必修科目として設置されている場合が14と多いことが分かる。

表2 授業形態と単位数

		単位数			
		1単位	2単位	不明	計
形態	講義	0	0	0	0
	演習	15	9	1	25
	講義および演習	1	0	0	1
	実技	0	0	0	0
	不明	1	0	0	1
	計	17	9	1	27

表3 配当年次・開講時期

配当年次・開講時期	科目数
1年次前期	2
1年次後期	10
1年次前期・後期	1
1年次後期・2年前期	2
2年次前期	3
2年次後期	2
3年次後期	2
不明	5
計	27

表4 必修・選択の別

必修・選択の別	科目数
必修（含 保育士・幼稚園教諭選択必修）	14
選択	6
不明	7
計	27

（4）授業のねらい、到達目標について

大学によりシラバス上の項目の表現が違い、「授業のねらい」「到達目標」「授業の主題」などの項目が載せられている場合と「ねらい・概要」「目標および概要」のように記載されている場合があった。内容としては、抽象的なものから具体的なものまで様々であったが、それらを概括すると共通して概ね3つに分類することができる。1つは、学生自身の感性や表現力・創造力を磨く、2つ目は幼児の表現に関する理解、3つ目は具体的指導法や保育技術の習得である。

（5）授業概要・内容、授業計画について

主たる授業概要・内容については、表5の通りである。15回授業が多くを占めるが、その前半の回では、幼児・保育の「表現」に関する講義や音楽・造形・言語・身体表現等をオムニバス形式で学ぶことが中心となり、後半は学生主体で総合的に創作・発表をするという計画が多かった。「グループ演習」等記載内容からは具体的内容が見えないものもあったが、基礎的講義以外のおおよその主たる授業内容をまとめてみた。

表5 授業概要・内容

主たる授業概要・内容	科目数
人形劇の脚本化、上演	2
視覚教材の製作と発表、影絵の製作・上演	1
語りと音楽、お話をもとにした創作	1
衣装を製作して物語発表、自己紹介絵本の製作	1
音楽遊び、造形遊びの実践と事例検討など	1
視覚教材を活用した音楽表現、絵本の教材化	1
保育教材の実践的理解（音楽表現・身体表現遊び）	1
音楽・造形・劇的な活動による表現の指導法および教材の作成の演習	1
幼児向け物語の創作、発表	1
リズム劇の制作、発表	1
日本・世界の保育実践からの考察	1
様々な子どもの表現活動（遊び）の実践	1
造形表現、音楽表現の活動を計画し実践する	1
グループごとに創造的表現活動の創作	1
演劇の上演・発表	3
オペレッタの計画、地域公開	2
身体・音楽・造形表現の理論と実技	1
児童文化財（おもちゃ・人形・紙芝居）の製作と実演	1
ごっこあそびの実践ビデオからの考察	1
年間の保育実践ビデオからの考察	1
表現遊びの指導計画立案、模擬保育	1
詩、絵本に合わせて作曲、発表	1
その他（グループ演習、内容については不明）	1
計	27

(6) 担当教員について

担当する教員数を表6に示した。教員の専門性に関してはおおよそであるが、音楽・造形分野を専門とする教員、保育経験のある教員が多いものと思われる。

表6 担当教員数

担当教員数	科目数
1名	15
2名	9
3名	2
5名	1
計	27

4 考察

いくつかの大学において、これまでの分野別指導とは別に、子どもの日常的な遊びの中での素朴な表現を理解していこうとする取り組みがみられる。子どもの発達子どもの自発的な活動である「遊び」によって成り立っており、「ごっこ」や「ままごと」に代表されるような役割遊びをはじめとする無数の名もない遊びそれぞれの意義を知り、そのための環境を整えていくことが保育者の役割である。保育

者養成課程においても子どものそれら「遊び」について深く考察する機会を持つことは大変重要であると考えられる。一方多くの養成課程において、演劇、人形劇やミュージカルが取り上げられていた。これは、保育者となる学生自身の感性を磨き、保育者として子どもの行事指導にあたる際の下敷きとなるものであろう。その場合留意すべきは、それがあてがわれた課題の練習の成果を披露するものになってはならないという点である。幼稚園や保育園では、確かに生活発表会などの行事において劇やオペレッタといった表現活動の発表が行われることも多い。しかし、そこで大切にされるべきは、子どもたちが自由感を持って活動に取り組み、自分なりの表現を楽しんで発揮できるかどうかである。それであるならば、保育を学ぶ学生たちの表現活動も、それぞれが主体性を持って取り組み、一人ひとりが自分らしく表現することを目指すものでなければならない。そしてまた、保育者は、幼稚園や保育園で行われている発表会の劇やオペレッタは子どもたちの「表現活動の一つ」に過ぎないことを自覚しなければならない。このことは、歌う、演奏する、描く、話すといった全ての活動にもあてはまる。課題活動が「生活と遊離した特定の技能を身につけさせるための偏った指導」になってはならない。表現的活動の教育を技術的な指導のみで捉えることなく、表現する子どもの心情を汲み取ることの大切さを学生に伝えることが重要である。

参考文献

- 1) 民秋言「幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷」萌文書林 (2008)
- 2) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館 (2008)
- 3) 厚生労働省「保育所保育指針解説書」フレーベル館 (2008)
- 4) 花篤實・岡田愍吾編著「新造形表現 理論・実践編」三晃書房 (2009)
- 5) 阿部明子・竹林実紀子「表現」東京書籍 (2000)
- 6) 神谷栄司「ごっこ遊び・劇遊び 子どもの創造」京都法政出版 (1993)